情報化時代における図書館員像とその未来
：ニコルソン・ベイカー論争を参考に

薬師院　はるみ

Librarianship and its Future in the Digital Environment
: through the Controversy Raised by Nicholson Baker

Harumi YAKUSHIIN

はじめに

コンピュータ化による情報提供機能の拡大は、今日の図書館が目指すべき方向の一つだとされている。図書館は、新しい情報機器や技術を導入することで、情報化社会における利用価値や存在意義をますます高めていくべきだというわけである。

ただし、こうした図書館の姿勢に対しては、賛辞ばかりが寄せられてきたわけでもない。中でも、米国の作家ニコルソン・ベイカー（Nicholson Baker）による一連の抗議活動は、主として同国の図書館内外で大きな反響を呼んでいる[1]。ベイカーは、急速にハイテク化を進めつつある今日の図書館に対し、強い警告を発しているのである。

この抗議活動を、単なる時代遅れな繰言に過ぎないとして片付けてしまうこともできよう。これまでにも、図書館は、社会の技術的変化に合わせ、サービスを向上させるための道具や手段を積極的に取り入れてきた。そのことにより、図書館がその機能を飛躍的に拡大させてきたことも事実である。つまり、新しい技術の導入自体、なんら非難されるべき事柄ではないのである。実際、米国でも、ベイカーの抗議に対しては、単なる懐古主義に過ぎない、あるいは、図書館が果たすべき役割や、図書館現場が現実に抱える問題を理解していないとの反論が繰り返されてきた。だが、両者の議論はあまり噛み合わず、技術的優位性に基づく反論がベイカーを納得させることもなかった。

そこで、本論では、ベイカーによる警告や主張、さらには、それらに対してなされた数々の反論や意見をもう一度眺め直し、再検討することを試みた。というのも、ベイカーは、特にその抗議活動の初期において、新技術の導入自体を批判していたわけではなく、一方、それへの反論は、大抵の場合、新技術の必要性を盾に取る形でなされてきた。つまり、両者の間には、当初から、どこか基本的なすれ違いが存在していたと考えられるからである。加えて、そのすれ違いは、情報化が進む中で主流になりつつある図書館観と、従来の図書館観との間に生じた不整合の縮図としても理解することができると考えられるからである。つまり、図書館が物体としての資料ではなく、資料から抽出される情報を提供する機関へとその役割を変えていくことを無辜の技術的進歩とみなすか、大きな喪失を伴う形態変容と捉えるかが、両者の齟齬の基本的源泉だと思われるのである。

実際、情報革命なる言葉が示すように、情報技術の進展がもたらそうとしているものが、単なる道具的利便さだけではないということは、これまでにもしばしば指摘されてきた。そのことは、図書館の世界にも該当する。すなわち、今日の図書館が遂げようとしている変化は、従来経験してきた変化と同質なものではないのである[2)]。

変わろうとしているのは、図書館だけではない。情報革命は、図書館員が、確固とした専門職性を獲得する絶好の機会だともいわれている。ただし、ここで獲得されるであろう新しい専門職性は、従来の専門職性の単純な延長線上に存在するわけではない。極論すれば、古い専門職性を遺棄した断絶の後に初めて成立するものだとさえいえよう。そして、この断絶もまた、目録の問題、およびベイカーの抗議活動が生み出した論争の原点を体現していると考えられる。ベイカーにとって、この種の断絶は、単なる進歩ではなかったのである。

これまで、ベイカーを巡る問題は、大抵の場合、その主張への反論あるいは同調として、そうでなければ、新技術導入の是非や功罪を議論したり、図書館が目指すべき方向を模索するために取り上げられてきた。しかし、本論の目的は、ベイカーを擁護することでもなければ、それに反論することでもなく、現実主義的ないしは問題解決型の提言を行うことでもない。むしろ、片側の主張に立つことよりも、両者の間に横たわる溝を直視することを目指している。すなわち、ベイカーの眼差しが向かう射程を道標としながらも、問題自体の深層に横たわる本質的な論点を問い直そうと試みたのである。したがって、本論は、ベイカー研究として位置づけられるものではなく、その抗議活動全体を取り上げるものでもない。そうではなく、コンピュータ化の発祥地である米国の図書館界における論争を手がかりに、オンライン目録が技術論を超えて与えた影響、さらには、コンピュータ化が図書館や図書館員に及ぼしつつある変化の本質を解明しようとする基礎的研究であり、その際、ベイカーによる初期の抗議、具体的には目録に関する抗議を、主たる参照領域とするものである。

上の目的に照らし、本論では、ベイカー論争のみならず、図書館における目録の自動化やカード目録の利用停止といった一連の過程を、その初期にまで遡って考察した。具体的な出来事よりも、むしろそれらの出来事に対する人々の反応およびその傾向を検討することで、ベイカーによる見解の固有性や論争の特徴をより明らかにするよう努めた。そのため、学術論文だけでなく、会議録や報告書にいたるまで、できる限り多くの文献を参照し、そこに残された言葉を頼りに分析を進めている。

なお、米国の図書館界では、現在、ベイカーによる抗議活動の中でも、資料保存の問題が話題の中心となっている。ベイカーは、2000年に『ニューヨーカー』誌上で、そして、翌年には、自らの著書『ダブルフォールド』において、新聞や雑誌等のマイクロ資料化に伴う原資料の扱いに異論を唱え[3)4)]、それに対して、資料保存の研究家コックス（Cox）を中心とした一連の反論が展開されているのである[5)]。けれども、本論は、ベイカーの抗議活動の全容を伝えることが目的ではなく、そのため、主として、目録の問題に焦点を当てて論じている。

第１章では、わが国の図書館においても、カード目録からオンライン目録への移行は、単なる道具の交代以上の意味を持つと認識されていたことを明示する。すなわち、オンライン目録の導入は、情報通信技術を利用した新しいサービスの出発点だったとみなすことができ、ここ

に、一つの大きな転回点を見出すことが可能なのである。

第2章では、まず第1節で、米国の図書館界において、目録の機械化に対しては、当初より、その機能的優位性が過度に強調されていたのみならず、カードの欠点を解消するものとして以上の期待がよせられていたことを明らかにする。同時に、カード目録に対しては、その旧弊性や保守性ばかりが指摘されるようになっていたことを確認する。

次に、第2節では、目録に関するベイカーの抗議と、それに対する図書館界の反応を紹介し、両者の主張が互いに齟齬をきたしていることを示す。

また、第2章を通じ、図書館界が、一貫してオンライン目録の機能的優位性を強調し続けたこと、そして、ベイカーのように、カード目録に残された過去の図書館員による優れた専門技術を評価しようとの意見は極めて稀であることを指摘する。

第3章第1節では、ベイカーの抗議活動を軸にサンフランシスコ公立図書館をめぐる論争を取り上げる。また、この論争を手がかりに、図書館員にとって、電子化への動きは、イメージを向上させる恰好の好機だとみなされる傾向にあったこと、そして、この傾向が、前章で確認した齟齬の一因ともなっていることを明らかにする。

第2節では、オンライン目録は、単にカード目録を機能的に発展させた延長線上に位置するものではなく、両者の間には異質性が存在することを示す。また、その異質性故に、オンライン目録の機能的優位性を主張するにも、目録概念自体の変容を伴わざるを得ないことを明らかにする。加えて、図書館の自動化に伴って獲得されることが期待されている新たな専門職性は、古い専門職性を、一時的であれ一旦否定することで肯定される性質のものであることを論証する。そして、本論の到達点として、ベイカーに対する諸反論の背後に、図書館員が抱く専門職性への憑依観念を見出すことができ、問題の源泉がそこに存することを解明する。

最終章では、主に第3章で解明した状況が、わが国の図書館界にも該当することを補足した上で、その今後のあり方について、若干の再考を試みる。

1　図書館の情報化：オンライン目録という転回点

かつて、バックランド（Buckland）は、社会における情報技術の進展が著しい中、図書館の世界でも、ある種の根本的な基盤再構築が進行中であるとの認識を示した。そして、そのような図書館内の変化をすべての人に明示したのは、オンライン目録であると断言している[6]。そうであるなら、カード目録からオンライン目録への移行は、情報通信技術を利用した新しいサービスへの出発点だったということになり、ここに一つの、けれども大きな転回点を見出すことができよう。そこで、議論を始めるにあたり、本章では、この事実を確かめ、当時、日本の図書館界で、この移行がどのように捉えられていたのかについて確認しておく。

近年、図書館界では、情報技術の進展やコンピュータ化に伴う図書館の発展や変化といった問題が盛んに論じられている。けれども、つい最近まで、少なくともわが国では、ほとんどの公共図書館でコンピュータが導入されてはいたものの、その多くは業務用として使用されていたに過ぎず、利用者用については大半が検索用としての利用に限られていたのが現状である。なるほど、一部先進的な図書館では、すでに資料の電子化や電子図書館の取り組みが開始され

ていたのも事実である。それでも、全国の公共図書館における一般利用者にとって、情報通信技術を利用した新しいサービスとして、具体的に体験、ないしは想起された最初のものが、事実上、OPAC等のコンピュータ目録であったことだけは確かだといえるであろう。

実際、この状況は、これまでに実施された各種調査からも確認できる。例えば、1988年の図書館問題研究会コンピュータ委員会による調査によれば、当時、コンピュータを導入している公立図書館は全体の約3分の1に留まり、利用者用端末を用いていたのは、さらにその約1割に過ぎなかったとのことである。しかも、この導入初期の利用者用端末とは明らかに資料検索装置を指し、それ以外の利用については一切想定されてもいない[7]。

日本の図書館でコンピュータが使われ始めたのは1970年代半ば頃であり、それらは、ほとんどが大量の貸出・返却業務を迅速に処理する目的で導入されたのだという[8]。ただし、このようにコンピュータ利用が図書館業務に留まっている内は、利用者が受けるインパクトがそれほど大きいものであったとは考えにくい。だが、この利用者用端末、中でもOPACを導入する館はその後着実に増え続け、1997年に日本図書館協会目録委員会が実施した調査によれば、この時点ですでに6割弱の公立図書館が、利用者用目録としてOPACを用いている[9]。そしてこれは、1989年の前回調査[10]と比べても著しい増加率を示している。要するに、カード目録からコンピュータ目録への移行は、図書館のコンピュータ化を利用者に実感させた最初の出来事としてみなすことができるのである。

もちろん、カード目録であれ、コンピュータ目録であれ、図書館の目録であることに変わりはない。それ故、この移行は、単なる提示形態の変更にすぎないとの見方も成立するであろう。実際、森田は、米国でOPACが開発された時、その最初の目標は、従来のカード目録の機能を全部揃えることであったと指摘している[11]。つまり、OPAC研究で名高いヒルドレス（Hildreth）の発展段階論[12]に照らせば、第一世代のOPACは、形態こそ違うものの、従来の目録と同じ機能を備えることが目標とされていたにすぎないのである。

それにも関わらず、OPAC導入初期、この問題について書かれた文献からは、この新しい提示形態の目録に対し、単なる提示形態の変化以上の効果を見出しているとしか思えないような言葉をいくつも見つけることができる。そこで、次に、それらの言葉を直接引用し、その様子を紹介する。

例えば、堀込は、“OPACは図書館目録の形態の変化（カードからコンピュータへという移行）だけではないはずである”[13]と述べている。そして、この見解は、大日方による、“これからは、「OPACとカード目録の対比」という視点から、「コンピュータによる情報検索機能をいかにOPACに持たせるか」という視点でOPACをとらえていくべきである”[14]との意見にも類似する。あるいは、佐藤は、“OPACにより図書館の利用スタイルが根本的に変化しつつあることに目を向けることが重要である”[15]と主張した。そして、この主張は、桂による、“「紙メディア時代」、「機械化時代」の過程で確立してきた目録規則などに立脚した目録の概念枠組みや存在自体が「電子メディア・インターネット時代」において変容、再構成してゆくことは避けられない”[16]との見解にも通底する。また、この見解は、永田の言葉を借りれば、“OPACの出現は、……図書館を再編して、新しい図書館の構想の準備をし”[17]ているのだと

いうことになろう。

確かに、カード目録からコンピュータ目録への移行に伴って変化するとされる図書館の利用スタイルや目録の概念枠組み等の具体像が、必ずしも明確に予測されていたわけではない。しかしながら、本論が着目したのは、むしろ、具体的な将来像が描けないながらも、図書館が大きく変容していくことだけが予測されていた点にある。少なくとも、この移行は、電子化による図書館の変容が論じられる端緒を開くこととなったのである。

ここで明らかにされたのは、OPAC の導入が、単なる道具の交代以上の意味をもっていたということである。新しいサービスの出発点は、同時に、変容の出発点でもあったのである。かつてカード目録が、それ自体の発展を遂げながら図書館全体の姿を新しく変えていったように、コンピュータを用いた蔵書検索システムもまた、それ独自の発展を遂げる過程で目録の概念枠組みを変化させ、ひいては図書館のあり方や利用スタイルを変化させていくのであろう。ただし、それは、単なる具体的形態の変化ではない。後に見るように、その背後には、図書館像あるいは図書館観自体の変化、さらに、図書館員の専門職性に対する認識の変化までもが横たわっていると考えられるのである。

この問題について考えるため、次章からは、一旦、コンピュータ化の発祥地である米国図書館界の歩みに目を向けることとする。日本にも大きな影響を与えている米国図書館界での先行事例を手がかりに、コンピュータ化に伴う図書館の変容について考察しようと思う。

2　目録の機械化：その主産物と副産物

2.1　機械化の始まり：機能的有用性の追及

1969年 3 月、米国議会図書館により、いわゆる MARC の頒布が実施されることとなった。目録情報を機械可読形式に変換し、磁気テープ等の形で頒布するサービスが、試験段階を経て本格的に開始されたのである。加えて、MARC を母体に、オンライン・ネットワークを利用した分担目録作業も開始され、オンライン目録という新たな様式の目録が登場することになった。こうして、図書館目録は、機械化、あるいはコンピュータ化に向けての大きな一歩を踏み出したのである[18]。

この歩みは着実に進行し、様々な経過をたどりながらも、やがて目録や書誌記述に関する規則そのものにまで影響を及ぼすようになる。例えば、1970年代に現れた国際標準書誌記述（ISBD）においては、明らかに、書誌情報を機械可読形式に変換することが視野に入れられていた[19]。また、このことを踏まえ、1978年に刊行された『英米目録規則　第 2 版』も、目録作業のコンピュータ処理への対応に、その照準が向けられていた[20]。

こうした情勢下の1977年、米国議会図書館により、1980年 1 月には、カード目録の編成を停止し、同時に、『英米目録規則　第 2 版』を採用するとの意向が発表された[21]。この時、カード目録の編成停止に対しては、例えば、次のような根拠が、その決定に妥当性を与えたのだという。すなわち、多大な労働力に依存するカード目録は、機械化による人件費節約の恩恵を受けられないこと、館内の貴重な場所を消耗していくが、カード量の増加を防ぐ対策法は事実上存在しないこと、そして、膨大なカードの量に起因して配列規則その他が複雑になり、使いに

くくなっていること等である[22]。

議会図書館の発表は、図書館界全体にも大きな動揺をもたらした。実際、この事態は、目録革命とまでいわれた。というのも、この発表により、全米の図書館では、カード目録の利用停止やその時期、あるいは新形態の目録について、真剣に考える必要に迫られることになったからである[23]。

たしかに、議会図書館が新形態の目録に移行しようと、あるいは、新しい目録規則を採用しようと、他の図書館までもが直ちにそれに倣う必要などないと思われるかもしれない。事実、『英米目録規則　第2版』自体は、現存する目録の編成停止など全く要請してはいないのである[24]。だが、カード目録の取り扱いに苦慮していたのは、何も議会図書館だけだというわけではなかった。それどころか、この当時、“カード目録は、……場所に対する飽くなき欲望を持った獣となってしまった”[25]と喩えられるほどであった。すなわち、多くの図書館でも、膨大な量に達したカード目録の不便さや硬直性、そして、場所の問題に悩んでおり、議会図書館の動きは、むしろカード目録の欠点を一斉に語り始める契機として働いたのだと思われる。

一方、オンラインの目録の方は、カード目録に比べてはるかに柔軟性が高く、データ管理も容易で、要する場所もずっと少なくて済むと認識されることがほとんどであった。それは、事実上全ての点において、明らかにカード目録よりも優れているとみなされた[26]。のみならず、コンピュータを利用して作成された目録でさえあれば、たとえそれが冊子体であろうと、コンピュータ出力マイクロフィルムであろうと、カードの問題を解決し得ると主張されることもあった[27]。“現存する目録カードは、自動化のみが制御できる情報の化け物”[28]だとまで喩えられ、それ故、目録の自動化は避けられないとの見解が一般化していったのである。

ところで、議会図書館におけるカード目録の問題は、この時初めて指摘されたというわけでもない。それどころか、同図書館では、すでに1920年代の半ばには、増大し続ける目録カードの取扱いに苦慮し、その一部を編成停止にしようと発案していたのだという。この発案自体は採用されなかったものの、その後も目録は増え続け、館内の場所を塞いでいったため、特に1950年代と1960年代に同様の発案が度々反復された。しかし、それが現実的な課題として具体化するのは、1970年代、つまり機械化やコンピュータ化の技術が登場する時代になる。1975年、議会図書館は、カード目録の編成を停止する決意を固め、同年のアメリカ図書館協会及び研究図書館協会の会議で、その決意を公表するに至ったという次第である[29]。

情報技術の導入以前、カード目録は、その量的増殖性等が問題視されようとも、そこに蓄積された技術や専門性自体が旧弊視されていたのではなかった。だが、本稿が確認する通り、図書館の外部で生まれた新技術こそが、紙製目録の旧弊性を浮出させ、認知させ、その認識を一般化させたのである。従来の議論は、この点を見落としている。

たしかに、全ての図書館関係者が、無条件に目録の自動化を歓迎していたというわけではなかったのかもしれない。実際、稀な事例ではあるが、1976年の『ジャーナル・オブ・アカデミック・ライブラリアンシップ』には、この動きへの懸念を示した投書が掲載されている。ただし、これは単に図書館の自動化が必ずしも現場主導で進められていないことへの不満を記したものにすぎず、自動化自体に反対するものではない。それどころか、図書館の自動化、中でも目録

のコンピュータ化は大いに歓迎すべきだと記されているのである[30]。

ところが、この種の懸念でさえ、伝統的な保守主義の表象にすぎないとして一蹴されていたようである。そんなことよりも、自動化をいかに速く成し遂げるかという問題に議論を集中すべきだというのが、当時の趨勢であった。先の投書もまた、次のような認識を論拠に反論されていたのである。

> コンピュータと図書館の適合性を明示し、劇的に表現した第一番目のものであったため、OCLC は、……アレキサンドリア図書館と同じくらい魅惑があり、人を動かさずにはおかないような、現代の驚異となっている[31]。

ここでは、OCLC がアレキサンドリア図書館にも匹敵する歴史的価値を持つ理由として、それがコンピュータと図書館を調和させた点が挙げられている。けれども、本節で概観した通り、新技術がもつ史的革新性の主たる根拠として挙示されてきたものは、その機能的有用性ばかりである。たしかに、機能的有用性もまた、コンピュータ化が内包し発散する魅惑であるに違いない。だが、なぜ、そのことが、カード目録の欠点をあげつらうことに繋がるのか。換言すれば、もし、オンライン目録がカード目録の単なる機能的発展に過ぎないのであれば、カード目録が蓄積してきた英知が継承されこそすれ、その保守性や旧弊性が、遡及的追訴のごとく指摘されることはなかったはずなのである。この点こそ、本稿の着眼点である。

なるほど、図書館が同時代の技術的進歩に合わせ、目録の形態を次々と変化させてきたことも事実である。その意味では、カード目録も歴史的産物の一つにすぎず、何も究極の英知や真実を具現しているわけではない。それでも、図書館にとって、カード目録の功績は多大であったはずである。もはやその役割を終えてしまったのだとしても、カード目録もまた、コンピュータ目録同様、図書館や利用者の要請に応えるべく、専門的技術を駆使して開発されたものであることには変わりない。だが、本節で解明したように、当時の図書館界では、新技術の機能的優位性が強調されることは多くとも、過去の専門技術を評価しようとの訴えは、保守的な態度だと位置づけられていた。そして、次節以降で示されるように、その訴えは、図書館外部から発せられることになるのである。

2.2 機械化の帰結：機能的無用性の追放

1994年4月、雑誌『ニューヨーカー』に、「ディスカーズ」と題した記事が掲載された[32]。ニコルソン・ベイカーが、図書館におけるカード目録の位置づけに対して、異論を唱えたのである。この異論の影響力は大きかった。例えば、同月の『インフォメーション・ウィーク』などは、早速この記事を取り上げ、全米の図書館で、目録が次々とデジタル形式のものに置き換えられている事態に疑問を投げかけた[33]。いずれにせよ、図書館への異論が、ベイカーという人気作家によって発せられたこと、さらに、スタッドウェル（Studwell）らも指摘するように、その記事が、図書館関係者だけでなく、全米の教養人を読者層とする定評ある文芸週刊誌に掲載されたことで、カード目録の問題が、一躍注目を浴びることになったのである[34]。

後に、エッセイ集『思考のサイズ』[35] にも収められたこの記事は、図書館界にも大きな波紋を投げかけた。実際、『ライブラリー・ジャーナル』誌上のインタビューにおいて、ベイカーは、図書館関係者から山ほどの手紙を受け取ったと答えている。ただし、同インタビューによれば、ベイカーは、当初から図書館への抗議を意図していたわけではなかったとのことである。むしろ、紙のデータベースともいえるカード目録の技術を、その黄昏の時代に称賛するつもりに過ぎなかったのだという。この意図の背後には、それと置き換えられたもの、つまり、いわゆるデータベースの目録ばかりが多くの人に称賛されているという事情があった。ところが、取材が進むにつれ、行われていたのは単なる置き換えではなく、物理的な破壊であることがわかったのだという。そして、ベイカーにとって、そのような行為は、先行する図書館員の仕事に対する狭量で想像力のない敵対行為にも等しいとさえ感じられたというわけである[36]。

「ディスカーズ」には次のように記されている。

> （16世紀が専門の歴史家ヘレン・ランド・パリッシュが、“アレキサンドリア図書館の焚毀にも等しい”と述べた、）この近視眼的で知性に反する国民的発作のより奇妙な特徴の一つは、……それが、図書館外からの悪意を持った圧力によるものではないということである。……そして、信じられないことに、誰も図書館幹部が行っていることへの不平を公にしてはいない。誰も悲しんではいないのである[37]。

ここでは、カード目録の処分が、嘆かわしいこと、あたかも破滅的な行為であるかのように位置づけられている。しかしながら、その悲しみや不満の源泉はいったいどこにあるというのだろうか。前節で確認したように、カード目録に対しては、すでに数々の難点が指摘されている。そもそも、それらの難点を解消するために、オンライン目録への移行が進められたはずである。事実、ベイカーの認識とは裏腹に、コンピュータと図書館の結合は、アレキサンドリア図書館にも匹敵する革新的価値を持つとさえ語られている。このような視点に立脚するなら、つまり、機能や有用性のみを基準に考えれば、ベイカーの訴えは、全く的外れかつ旧弊なものだとみなさざるを得ないであろう。

実際、多くの図書館関係者は、オンライン目録の機能的優位性を主張することや、カード目録の実用的価値を否定することでベイカーに反論した。例えば、ダグラス（Douglas）は、ほとんどのカード目録には、永久保存に値するような歴史的価値など存在しないこと、そして、カード目録が持つ数多くの欠陥は、オンライン目録により克服されたことを主張した。また、カード目録やそれらに貢献した図書館員の知性は、失われたのではなく、単に形を変えただけだとも述べている[38]。同様に、マックス（Max）も、カード目録は、すでに有用性を失っているとの考えを示すと共に、過去においてさえ、それが使いやすい検索ツールであったことを否定した[39]。いずれにせよ、カードを保持し続けるべきだというベイカーの意見を全否定している点で、両反論者の見解は一致するのである。

たしかに、ベイカーの抗議に対しては、強硬に反論するのでなく、むしろ柔軟な対応をすべきだとの意見も存在する。例えば、マーティン（Martin）は、友人の一人が、ベイカーの記

事から多くを学んだと述べた逸話を紹介し、その上で、カード目録からオンライン目録への移行を、喪失だとみなす利用者も存在することを認めている。しかし、だからといって、ここでカード目録の利用価値までもが認められたわけではない。むしろ、その点に関しては完全に否定されている。つまり、ここでは、急激な変化についていけない利用者からも理解を得るため、図書館の方針を充分に説明すべきだと主張されているにすぎないのである[40]。

要するに、ベイカーの抗議は、ヘルスタイン（Helstien）による反論に代表されるように、懐旧の情を喚起することはあっても、図書館員が直面している現実的な問題を全く理解していないものであると把握されるのが通常だったのである[41]。

なるほど、検索手段として眺めた場合、この当時には、すでにオンライン目録の方がはるかに勝っていたと考えるのが自然であろう。だが、たとえそうだとしても、ベイカーは、少なくとも古い目録が、デジタル方式では代替できないいかなるものを提供していたのかがわかるまで、カード目録を保持し続けるよう訴えた。オンライン目録とカード目録を、イソップの兎と亀に喩え、現今の図書館は、あたかも兎の勝利を確実にするために、亀を殺しているに等しいと抗議したのである[42]。

しかし、注意深く読めば明らかなように、ベイカーは、なにもカード目録を更新し続けるよう求めたわけではない。テイラー（Taylor）やアップチャーチ（Upchurch）らが断言したように、ベイカーは、決して、第二のラッダイドになろうとしたわけではないのである[43]。事実、ベイカーは、自分自身も、すでに、オンライン目録の愛用者であることを披瀝し、その機能を充分に認めた上で、今や、それなしでは、図書館資料の整理は不可能だとの見解まで示している。つまり、ベイカー自身もまた、兎の速さを充分承知しており、その上で、自らの抗議の意図を次のように説明するのである。

> 私は、オンライン目録をやめて、手で綴込む作業や、カードの修正に逆戻りすべきだとはどこにも提案していない。……カード目録には、幾世代もの図書館員による蓄積された知性と骨の折れる仕事が残されている。そのためだけに、それらは保存に値するのである[44]。

それにもかかわらず、本節で確認したように、大部分の図書館関係者は、ベイカーを、単なる懐古主義者だとみなし、オンライン目録の機能的優位性に基づく反論ばかりを繰り返した。すなわち、この論争では、両者の主張が基本的な部分で齟齬をきたしていると考えざるを得ない。本稿が第一に着目するのは、まさしくこの齟齬なのである。

ベイカーが求めたのは、亀を勝たせることではない。そうではなく、殺さないこと、少なくとも、その緩慢だが着実であった歩みを消さないことである。カード目録には、それに取り組んできた図書館員によるかけがえのない知性が刻印されている。すなわち、過去の知性や蓄積された文化の保存を、図書館の一使命に数えるとするならば、自らが築き上げた知性を否定すべきではないというのが、ベイカーの見解だといえよう。

図書館が、一時代をカード目録と共に歩んできたという歴史的事実を消すことはできない。

コンピュータとの機能競争に敗れ、今や役割を終えたのだとしても、そこには、かつての図書館員による優れた専門技術が集約されている事実もまた、否定することはできない。すなわち、グラスウォル（Grathwol）が指摘する通り、ベイカーこそ、図書館員による優れた専門技術を高く評価する聡明な図書館利用者だとも考えられるのである[45]。

図書館員が専門性の向上を目指し、新技術の導入を模索することは、当然であろう。しかし、本論が見出し、新たに提起する問題は、なぜ過去の専門性に対する賞賛までもが率直に受け容れられないのかという点にある。なぜ多くの図書館関係者は、ベイカーのように、過去の図書館員による優れた専門技術を高く評価しようとしないのか。

たしかに、オンラインへの移行という時代的趨勢に抗うことはできない。過去をいかに評価しようとも、現実世界は前に進んで行く。ベイカーの抗議にしても、クローフォード（Crawford）が指摘したように、感傷的な戯言にすぎず、時代の波の中で、その激しい感情もあっさり静まるだろうと思われていた。だが、それは静まらなかった[46]。それどころか、ベイカーの抗議活動は、1996年に、再び大きな注目を惹くことになるのである。次章では、この抗議を道標にしながら、新しい時代的趨勢の中で、図書館員の専門性に対する認識自体が変容したことを確認し、そして、その変容こそが、カード目録問題の根底にあることを論証する。

3　専門職化と情報革命

3.1　好機としての情報革命

ベイカーによれば、現代の図書館員は、カード目録を高度な専門的知識の集約としてみなすどころか、ひどく嫌っているという。というのも、それには、地位が低く、屈従的でおとなしい図書館員といったイメージが伴うからだというのである。なるほど、この見解は悲観的に過ぎ、同調し難いかもしれない。それでも、図書館員の職務は、それに値する敬意を受けてこなかったというベイカーの評価を否定することはできないであろう。だからこそ、図書館員は、専門職化への努力を続けてきたのである。サンフランシスコ公立図書館の新本館の開館は、この努力の大きな成果の一つであったにちがいない。だが、それは、ベイカーによる抗議活動の新たな舞台と化したのである。

1996年４月、世界に通用するデジタル時代のモデル公共図書館という触れ込みの下、サンフランシスコ公立図書館の新本館が開館した。時の館長は、コンピュータ技術の唱道者としても名高いケネス・ドーリン（Kenneth Dowlin）である。この新本館には全国的な関心が呼せられた。建物の斬新さに加え、最新式のコンピュータ技術が装備されていること等を理由に、21世紀に相応しい新しいタイプの図書館として注目されたのである[47]。

しかし、新時代のモデル図書館の誕生には、ある犠牲が伴っていた。輝かしい先端技術の陰で、多くの書物が、切り捨てられようとしたのである。同図書館は、新館への移転に先立って大量の書物を処分し、このことは、地元新聞に大きく報じられた。だが、問題は、書物の処分自体ではない。というのも、従来から、書物は除架という形で処分されてきたからである。ただし、その際には必ず慈善団体等に連絡され、不要本の再利用が認められていた。ところが、今回の処分は、それらの団体に知らされることもなく実行された。のみならず、その措置の主

目的は、新しい本やコンピュータ機器の場所を確保することだったのではないかとの疑いまで持たれたのである[48]。

噴出した問題はそれだけではない。その一つが、目録カードの処分問題である。同図書館では、移転を機に、すでに実用性を失っていたカードの処分を計画していた。これに対し、ベイカーを中心とする人々が抗議した。79年間使われてきた目録カードは、サンフランシスコの重要な歴史的遺産であり、手放すべきではないというのである[49]。この問題に関して最終的に妥協したのは図書館側であった。目録カードは保存され、新館で公開されるという、異例の決定が下されたのである[50]。

その後、ベイカーは、『ニューヨーカー』誌上で、再び図書館の問題を取り上げ、サンフランシスコに代表されるハイテク型図書館では、新技術の導入と、その顕示に熱心な余り、堅持し続けるべき伝統的使命を疎かにする傾向があると主張した[51]。ベイカーは、この傾向を憂慮し、過去に向けられた憎悪犯罪という言葉さえ用いながら近年の図書館に対する否定的な見解を発し続けた[52]。サンフランシスコ公立図書館のカード目録にしても、単に歴史的遺産としてではなく、移転以前の蔵書の存在証明、そして、憎悪犯罪による犠牲の証拠として永く保存すべきだと訴えたのである[53]。

疑問を呈したのは、ベイカーだけではなかった。例えば、『ロサンジェルス・タイムズ』には、旧館時代からの熱心な一利用者が、この新館に怒りと裏切りを感じたと述べたことが紹介されている。最新技術の背後で、この図書館は、その精神を置き忘れてきたのではないかというのである[54]。『ニューズウィーク』誌もまた、同館を通信網の張り巡らされた空港のようだと形容しながら、これが本当に図書館なのかという違和感を表明した。その記事には、米国の多くの図書館が、かつてのかび臭いイメージからは程遠くなり、それらは、読書家にとって、まるで電子化されたテーマ・パークのように感じられるとさえ記されている[55]。

今回の抗議に関して、ベイカーは、大勢の図書館員を代弁しているのだと主張した[56]。一方、館長ドーリンは、批判者が懐古趣味的な観点からのみ図書館を捉えていると全面的に反論した。新館の方針に批判的な人は、遅れているのであり、ベイカーに対しても、サンフランシスコの人々や、その人々の要望を理解していないと批判した[57]。つまり、スカイラー（Schuyler）の解釈同様、新技術にはラッダイドがつきものであり、ベイカーもまた、その一人にすぎないというわけである[58]。

あるいは、単なる反論ではなく、図書館側の反省を促す主張が展開されることもあった。例えば、ベリー（Berry）は、図書館が、電子図書館の構想や印刷物に対する今後の方針について、利用者の理解を得るための努力を充分にしてこなかったことに対する遺憾の念を表明した[59]。だが、これにしても、批判者を遅れていると位置づけている点では、ドーリンの主張と何ら変わりはない。要するに、遅れている者に対して、現行の方針を説明する必要性が主張されているにすぎないのである。

本稿が注目するのは、図書館側が、伝統的な図書館像に価値を見出す者を、懐古趣味だと位置づけた点である。逆から見れば、自分たちが目指す図書館像こそ、進歩したものだということになろう。要するに、図書館側にとって、電子化への動きは、同一目的に対する道具的交代

ではなく、図書館観および図書館像自体の変化であり、しかも、単なる変化ではなく、進歩でなければならないということである。だが、道具の交代が、なぜ価値観や観点の進歩にまで結びつけられるのか。本論はその点に着眼し、以下で、その原因を追求する。

ハリス（Harris）らは、物質生産よりも情報や知識が重視される情報化社会、すなわち、ダニエル・ベルのいう脱工業社会の到来が、図書館員の専門職化にとって絶好の機会だとみなされていることを指摘した。そして、あたかもベルの理論を図書館界に応用したようなランカスター（Lancaster）の議論を、その代表として挙げている[60]。

けれども、周知の通り、ランカスターが予想したのは、図書館員が情報提供者として重視されるようになる可能性であり、従来のままの図書館員が重要視されることではない[61]。そもそも、ランカスターは、2000年までに、従来型の図書館は消滅すると予測していたのであり、図書館員に対しても、図書館という施設から独立し、情報サービスを利用者に直接提供する情報専門職として活動するよう強く勧めていたのである[62]。

この種の提言は、図書館界で全面的な支持を得るには至らなかった。逆に、今後も物理的場所としての図書館は意味を失わず、むしろその枠組の中でこそ、図書館員が専門職としての地位を獲得できると主張されたこともある。この考えの下、バーゾール（Birdsall）は、ランカスターを初め、図書館の未来像に電子図書館なる概念を採用した人々は、図書館を、単なる情報処理機関としか見なしていないと非難し、その見解に対する一連の反論を試みている。だが、バーゾールにしても、図書館界で、電子図書館なる概念が勢威を揮っている事実だけは認めている。その上で、その概念に対抗すべく、一連の反論を提起したのである[63]。

いずれにせよ、バーゾールにしてもランカスターにしても、現今の情報革命の下、図書館員がより高位の社会的評価を獲得するか、せめて現状の地位を維持するためには、何らかの対応策を要するという点に関しては一致している。そして、図書館の電子化が、その対応策の一つであったこと、少なくとも、図書館界から大きく支持を得た対応策であったことだけは確かだといえるであろう。つまり、図書館側とって、電子化への方向性を否定されることは、自らの地位の向上や維持の否定にも等しいのである。多くの図書館関係者にとって、ベイカーが古き時代の遺物の如く映じたことも不思議ではない。なぜなら、図書館員にとって、情報革命は、図書館や図書館員のイメージを向上させる恰好の好機に他ならなかったからである。

このような視座に立ち、次節では、再び目録の問題を取り上げる。電子化の推進と目録カードの保存が、対立する主張として展開されることとなった要因の一つとして、図書館員の専門職化という憑依観念を見出せることを論証しようと思う。

3.2　再専門職化のための脱専門職化

1996年11月の『ライブラリー・ジャーナル』は、前月に発表されたベイカーの抗議が、サンフランシスコ公立図書館への全国的なメディアの関心を誘発した事態を、近況報告という形で取り上げた[64]。コックスらも、図書館界では、歴史研究が着実に行われてきた一方で、過去に使用された物への関心が払われてこなかったことを認め、カード目録が、過去の図書館での実践を体現しているとの見方に対しても、異論の余地がないとさえ述べている。だが、これは、

ベイカーの批判に同調するものではない。つまり、カード目録に賞賛すべき専門性と知性を見出しているのではなく、それを、あくまでも今日の図書館が、新たなものを開発していく上で、乗り越えるべき克服対象、要するに遅れた物として捉えているのである[65]。なるほど、図書館が、目録の提示形態を次々と変えてきたことは、歴史的な事実に違いない。上田が指摘するように、図書館では、各時代に利用可能な最良の媒体を用いて目録を作ってきたのであり、そういう意味で、ある単独のものだけを特別視してみても無意味だということになろう[66]。

たしかに、そのような理解は、ごく自然であるようにも思える。だが、カードからオンラインへの移行は、単なる形態や媒体の変更に留まるものではない。例えば、バックランドは、元々、目録とは、書誌と図書館記録の両要素に由来する第3のレコード集合体であったことを指摘している。紙媒体に依存する限り、その集合体を作ることが、書誌と図書館記録をリンクさせる唯一の方法だったというわけである。ところが、このように、目録を、書誌と図書館記録を結び付けるためのものと定義した場合、目録の電子化が進めば、独立した存在としての目録は消滅するという、いささか逆説的な帰結に達せざるをえない。なぜなら、オンライン目録の優位性の一つが、書誌と図書館記録を包括し得ることにあるとの事実は、両者をリンクする機能自体を無用化することになるからである。となると、カード目録とオンライン目録は、必ずしも、目録という一つの概念を具体化した二形態だとはいえないことになる。この点に関連して、バックランドは、次のように述べている。

> カード目録は今や時代遅れの技術の限界の産物であったとするならば、カード目録の最も洗練された電子バージョンを発達させたとしても、それは方向の誤った考案物であるといえるし、それは、蒸気が優位な動力源となった後に帆船を改良しつづけることを思い出させる[67]。

要するに、蒸気という動力源が風力の単なる改良や発展として位置づけられないのと同様、オンライン目録をカード目録の単なる改良や発展の結果として理解することはできないということになろう。蒸気力の優位性を主張することは、それが風力という自然力活用の延長線上にあるのでは決してなく、動力源の概念自体を覆した点を明示することなのである。同様に考えれば、オンライン目録の機能的優位性の主張もまた、目録という概念そのものの変容を伴わざるを得ないことになる。

あるいは、仮に目録が一つの概念であるとしても、その外延および内包は、常に固定されているわけではない。今から約百年前、カッターは、近代米国目録法の出発点として位置づけられる『辞書体目録規則』で、その目的を掲げた[68]。それらが、図書館目録の目的の古典的定義として広く定着してきたことは周知のとおりであろう。ところが、1991年、グレガー（Gregor）らは、それらの内、図書館が所蔵する資料を示すとの定義が、現状にそぐわなくなったことを指摘した。目録はもはや、所蔵資料だけでなく、入手可能な全資料を示すものになったのだという。そのため、個別のオンライン目録は、事実上、全国的、または国際的なデータベースの部分集合に過ぎないというわけである[69]。この規定が十全なものか否かはともかく、

少なくとも、オンライン目録は、単にカード目録を機能的に発展させた延長線上に位置するものではないことだけは確かだといえるであろう。

1977年、米国中西部大学同盟主催の下、当時にわかに現実味を帯びつつあった目録作業の自動化に関する会議が開催された。後に発行された会議録の序文で、キンブラフ（Kimbrough）は、その会議の意義として、自分と同世代の図書館幹部の大部分が、自動化に対処するための正式な訓練を受けていないことを挙げている。つまり、その訓練は、わざわざ会議を開いて検討されるべき問題だったということであり、逆に言えば、新しい目録を受け入れるには、既存の訓練を延長するだけでは済まなかったということなのである[70]。

それだけではない。バーマン（Berman）は、同会議で、これからの目録担当者は、以前のように、消極的かつ従順で句読法にのみ目を向けるのではなく、活動的かつ自立的で外の世界に敏感であるべきだと主張した。目録の自動化は、図書館のイメージを高める好機ではあるが、そのためには、以前の目録が持っていた近寄り難く、神秘的な雰囲気を打ち砕く必要があるというのである[71]。

けれども、この図書館のイメージを高める出来事は、必ずしも図書館司書のイメージを高め、その専門職化を推進することに直結したわけではなかった。1983年、エスタブルック（Estabrook）は、目録に携わる職員の大部分が、次第に非専門職的労働者から雇われる傾向にあることを指摘した[72]。同様に、イントナー（Intner）も、合衆国の図書館において、元々、目録作業は究極の専門職としての仕事であったにもかかわらず、1980年代後半には、それが脱専門職化しつつあることを指摘した。実際、記述目録を作成するに当たっては必ずしも図書館学修士学位を得ている必要はないとまでいわれるようになり、OCLC との契約を交わした直後に、学位を有する何人もの目録担当者が解雇されたり配置転換させられたりしたのだという。ところが、1990年代に入り、事態は一転する。つまり、目録作業は再専門職化しつつあり、目録担当は、再び、図書館情報学修士にふさわしい特別な専門職としての知識が要求される困難な職務であると評されるようになったのである[73]。

ここで、この再専門職化という認識は、背後に二つの事柄を指示することになる。一つは、カード時代の目録作業にも、専門職性が存在したとの事実であり、もう一つは、自動化により、たとえ一時的にせよ、それが非専門職化したとの事実である。要するに、図書館の自動化は、まず古い専門職性を無効にし、その後、新たな専門職性を登場させたことになる。当然、両者の間には、違いが存在する。だが、この異質性は、図書館員の能力や知性に関する優劣に起因するわけではない。

なるほど、トムソン（Thompson）のいうように、カード目録は、効率が悪く、不経済で、時代遅れなものと見なされたことも事実なのであろう[74]。だが、そこに、図書館の一時代を担った知性や技術が注ぎ込まれてきたことも否定できない。カード目録は図書館蔵書の存在を示す道具以上のものとして捉えられてきたこともまた事実なのである。だからこそ、ドゥーゼンベリー（Dusenbury）は、目録の自動化について考慮する際の最も基本的な障害物として、古い目録に対して図書館員が抱く心理的な愛着を挙げ、図書館目録は資料を探すための道具にすぎないことを強調したのである[75]。

一方、新しい目録は、進んだものとしての魅力を漂わせていた。1982年、ゴーク（Gouke）らは、オハイオ州立大学の2分館で、オンラインとカードのどちらを用いた時の方が検索の成功率が高くなるかを調べる実験を行った。その結果、少なくともこの実験では、いずれの場合でも、カードを用いた時の成功率の方が高くなるとの結果が得られた。それでも、ゴークらは、ある被験者が、カード目録を用いた方が上手く行えるにしても、オンラインを好むとの感想を残した点に注目した。その感想こそ、目録間に存在する複雑な関係、なにより、未来の波を的確に要約しているものとして見なすことができるのだという[76]。要するに、少なくとも初期において、オンライン目録の魅力は、単なる機能性ではなく、未来への波といった、非常に抽象的な魅惑だったともいえるのである。

ここで確証された重大な事実は、自動化問題が、過去への心理的愛着と、未来へ向かう波との対立として位置づけられて来たという点である。だが、考えようによっては、心理的な愛着など、大した障害物ではないはずであろう。たとえば、先端医療が普及するための障害が、医師の伝統医術に対する心理的愛着に求められることはないだろう。仮にそれをもっているにしても、医師は、過去も現在も、そしておそらく未来も専門職であり続けるだろう。だが、図書館員は違う。たしかに、情報化社会の到来は、図書館員が専門職化する絶好の機会だとみなされた。また、目録の自動化は、その歩みに向けての出発点として位置づけられるものである。けれども、未来に向けて引かれた補助線は、過去の歩みの延長線上にあるわけではなかった。新たに専門職化し、従来以上の評価を求めるためには、過去を否定し、そこからの脱却を強調せざるを得ないからである。

ベイカーは、過去の図書館員の専門性を高く評価し、その知性に敬意を表した。しかしながら、その行為は、未来の図書館員の専門性を評価することと矛盾してしまう。なるほど、ベイカーは、オンライン目録の導入や図書館の機能的な発展自体に異議を唱えたのではない。また、その異議は、単なる時代錯誤や感傷に発するものでもない。それでも、過去の専門性を今さら高く評価することは、過去からの脱却を通じて新たに専門性を獲得しようとする方向性自体を否定してしまう。つまり、本論の到達点は、図書館員の抱く専門職性に対する憑依観念が、自らの過去評価にも影響し、新旧図書館観に断層を産み、ベイカー論争における齟齬の一源泉にもなっているということである。

おわりに

図書館史を線形の時系列の中で概観するなら、カード目録の後にその機能を受け継ぎながら発展させる形態としてオンライン目録が導入されたのだということになる。図書館は、その機能や存在意義を拡充させるため、コンピュータを取り入れ、発展させてきたのだということになろう。もちろん、この認識も一つの堅実な態度であり、間違いではない。ただし、この見方は、単なる全体的趨勢を、個別分野の自主的進歩と同一視しがちであるという短所を有する。実際には、図書館自体の進歩がカード目録を克服したというより、社会全体の変化が図書館にも影響したと考えるべきであろう。だが、従来の捉え方は、往々にして、克服の対象としてのみ過去を意味づける傾向があった。

この傾向は、日本の図書館界でも見受けられた。オンライン目録の導入問題が盛んに論じられていた当時の文献を眺めると、同様の論調をいくつも確認することができる。例えば、1990年に佐川は、日本の図書館でもOPACを設置する館が増えてきたことを紹介しながら、その設置が、図書館のイメージアップを図るためのＰＲ効果を狙ったものが多いのではないかと指摘し、さらには、“OPACはこれまでの目録と違い、目録規則や件名標目表といった、図書館側の規則にとらわれずに検索できるものとなり得る”[77] とも述べている。ほぼ同時期に石倉も、東京大学で導入されたOPACを紹介し、それにより、従来のように複雑な目録規則や配列規則に悩まされなくなったことを指摘し、加えて、以前の図書館技術は、図書館内では評価を得ていたものの、利用者がそれを真に便利で有効なものとみなしていたのかどうかについては疑問だと記している。というのも、これまでの図書館は、12.5×7.5cmの標準カードに象徴されるように、“まさに、内に内にそのエネルギーを燃焼させてきたかに見える”[78] からだというわけである。いずれにせよ、新技術は図書館や図書館員への評価を高めるものとして期待される一方、過去の技術が克服の対象としてのみ位置づけられた点で、日本の論調もまた、米国と同様なのである。

けれども、考えて見れば、12.5×7.5cmの標準カードは、紙媒体という制約下、可能な限りの技術を駆使し、見事なまでにコンパクト化した情報チップだともいえよう。当然、これほどの情報ツールの作成には、複雑な目録規則や配列規則が必要となる。なるほど、その複雑さ故に、利便性が犠牲にされたのかもしれない。それでも、カード目録には、過去の図書館員が、その専門性を磨きながら積み上げてきた歴史が刻み込まれている。この事実だけは、認めたいと思うのである。

たしかに、コンピュータ化や情報提供機能の拡大は、今日の図書館が目指すべき方向の一つなのであろう。図書館員が、これを機に、確固たる専門職性を追及しようとすること自体も、極めて妥当な態度である。また、新たな専門職性の獲得にあたっては、以前のものと、何らかの形での訣別を要することについても否定し難い。しかし、だからといって、その際に、必ずしも過去を蔑視する必要もあるまい。むしろ、ベイカーが主張するように、図書館員の仕事は、たとえ、過去において充分に認められて来なかったのだとしても、従来から知的な専門知識に裏づけられていたのだということを、広く訴えるという考え方も可能なはずである。カード目録を未来に遺すことは、その証拠となる資料の保存だと考えられないだろうか。

注・引用文献

1）薬師院はるみ「過去を未来へ：ニコルソン・ベイカーの願い」『カレントアウェアネス』No. 272, 2002.6, p. 15-18.

2）薬師院はるみ「情報革命がもたらす図書館の変容」『京都大学　生涯教育学・図書館情報学研究紀要』Vol. 1, 2002.3, p. 43-57.

3）Baker, Nicholson. “Deadline,” *The New Yorker*. Vol. 76, No. 20, 2000.7.24, p. 42-61.

4）Baker, Nicholson. *Double Fold: Libraries and the Assault on Paper*. New York, Random House, 2001, 370p.

5）Richard J. Cox. *Vandals in the Stacks?: a Response to Nicholson Baker's Assault on Libraries.*

Westport, Conn., Greenwood Press, 2002, 219p.
6）Buckland, Michael. K.『図書館サービスの再構築』[*Redesigning Library Services*] 高山正也、桂啓壮訳、勁草書房、1994、129p.
7）図書館問題研究会『公共図書館におけるコンピュータ導入の現状と問題点』日外アソシエーツ、1989、179p.
8）西村一夫「コンピュータテクノロジーがもたらす資料提供サービス」『図書館界』Vol. 51, No. 5, 2000.1, p. 298-303.
9）日本図書館協会目録委員会編『目録の利用と作成に関する調査報告書』日本図書館協会、1998、104 p.
10）岡田靖「『図書の整理に関する調査1989』の集計報告及び分析」『現代の図書館』Vol. 28, No. 2, 1990. 6, p. 116-126.；同 Vol. 29, No. 1, 1991.3, p. 52-58.
11）森田一子「アメリカに於ける OPAC：その発展と最近の動向」『情報の科学と技術』Vol. 41, No. 6, 1991.6, p. 483-489.
12）Hildreth, Charles R. "Pursuing the ideal: generations of online catalogs," *Online Catalogs, Online Reference Converging Trends.* Brian Aveney and Brett Butler, eds. Chicago, American Library Association, 1984, p. 31-56.
13）堀込静香「OPAC」『現代の図書館』Vol. 31, No. 2, 1993.6, p. 133-137. 引用は p. 134.
14）大日方聖信「上智大学の SAINT-OPAC システム：利用者の反応と今後の改善点」『情報の科学と技術』Vol. 41, No. 6, 1991.6, p. 463-473. 引用は p. 471.
15）佐藤義則「学内ＬＡＮとの接続による OPAC 検索環境の拡張」『情報の科学と技術』Vol. 41, No. 6, 1991.6, p. 498-504、引用は p. 503.
16）桂啓壮「OPAC の変容：欧米の動向を中心にして」『現代の図書館』Vol. 33, No. 4, 1995.12, p. 264-273. 引用は p. 271.
17）永田治樹「OPAC の展開：次世代の図書館像を求めて」『情報の科学と技術』Vol. 41, No. 6, 1991.6, p. 457-462. 引用は p. 460.
18）Avram, Henriette D. "Machine-readable cataloging（MARC）program," *Encyclopedia of Library and Information Science. Vol. 16.* Allen Kent and Harold Lancour, eds. New York, Marcel Dekker, 1975, p. 380-413.
19）Sinkankas, George M. and Jay E. Daily. "International cataloging and International Standard Bibliographic Description," *Encyclopedia of Library and Information Science. Vol. 12.* Allen Kent and Harold Lancour, eds. New York, Marcel Dekker, 1974, p. 278-320.
20）Gorman, Michael and Paul W. Winkler, eds.『英米目録規則　第２版』[*Anglo-American Cataloguing Rules 2nd ed.*] 丸山昭二郎他訳、日本図書館協会、1982、696p.
21）"LC to freeze card catalog," *Library of Congress Information Bulletin.* Vol. 36, No. 44, 1977.11.4, p. 743-745, 746.
22）Fasana, Paul J. "Closing the catalog: keynote presentation," *Closing the Catalog: Proceedings of the 1978 and 1979 Library and Information Technology Association Institutes.* D. Kaye Gapen and Bonnie Juergens, eds. Phoenix, Ariz., Oryx Press, 1980, p. 6-20.
23）Savage, Noel. "News report 1978," *Library Journal.* Vol. 104, No. 2, 1979.1, p. 155-169.
24）Kilgour, Frederick G. "Impact of AACR2 on economic viability of libraries," 前掲22)、p. 36-40.
25）Malinconico, S. Michael and Paul J. Fasana. *The Future of the Catalog: the Library's Choices.* White Plains, N.Y., Knowledge Industry, 1979, 134p. 引用は p. 14.
26）Malinconico, S. Michael. "The disposable catalog," *Requiem for the Card Catalog: Management Issues in Automated Cataloging.* Daniel Gore et al., eds. Westport, Conn., Greenwood Press, 1979, p. 41-63.
27）Kennedy, Gali. "Problems with the card catalog: present and prospective," *The Card Catalog:*

Current Issues. Cynthia C. Ryans, ed. Metuchen, N.J., and London, The Scarecrow Press, 1981, p. 42-46.

28) Hazen, Dan C. "The assumption of automation or: the card catalog is dead! Long live the card catalog!," 前掲27)、p. 30-34. 引用は p. 31-32.

29) Rather, Lucia J. "Closing the catalogs: plans at the Library of Congress," 前掲22)、p. 134-140.

30) Krieger, Tillie ed. "Catalogs and catalogers: evolution through revolution," *The Journal of Academic Librarianship.* Vol. 2, No. 4, 1976.9, p. 172-179.

上記は、以下で若干の訂正がなされいる。

Chan, Lois M. "Letters to the editor," *The Journal of Academic Librarianship.* Vol. 2, No. 5, 1976.11, p. 222.

31) Axford, H. William. "The great rush to automated catalogs: will it be management or muddling through?," 前掲26)、p. 169-180. 引用は p. 173.

32) Baker, Nicholson. "Discards," *The New Yorker.* Vol. 70, No. 7, 1994.4.4, p. 64-86.

33) "Seen in the media,". *Information Week.* 1994.4.18, p. 72.

34) Studwell, William E. and Elaine Rast. "The rest of the world discovers cataloging," *Technicalities.* Vol. 14, No. 9, 1994.9, p. 2-3.

35) Baker, Nicholson. *The Size of Thoughts: Essays and Other Lumber.* New York, Random House, 1996, 355p.

36) Dodd, David. "Requiem for the discarded card catalog," *Library Journal.* Vol. 121, No. 9, 1996.5, p. 31-32.

37) 前掲32)、引用は p. 64-65.

38) Douglas, Nancy E. "Debating 'discards': a response to Nicholson Baker," *Rare Books & Manuscripts Librarianship.* Vol. 9, No. 1, 1994, p. 41-47.

39) Max, Patrick J. "What's wrong with scrapping the card catalog?," *The Chronicle of Higher Education.* Vol. 40, No. 43, 1994.6.29, p. A44.

40) Martin, Susan K. "Keeping pace with the users," *The Journal of Academic Librarianship.* Vol. 20, No. 4, 1994.9, p. 225.

41) Helstien, Brian A. "Libraries: once and future," *The Electronic Library.* Vol. 13, No. 3, 1995.6, p. 203-207.

42) Smith, Joan. "Card catalog massacre 'not just being replaced, but... destroyed'," *San Francisco Examiner.* 1996.4.17.

43) Taylor, Alan. "Off the rails on a train of thought," *The Scotsman.* 1996.3.23.; Upchurch, Michael. "A trove of treasures large and small," *The Seattle Times.* 1996.3.24.

44) Baker, Nicholson. "A couple of codicils about San Francisco," *American Libraries.* Vol. 30, No. 3, 1999.3, p. 35. 引用も同頁

45) Grathwol, Mary. "Review of the complaint of a catalog (card) lover," *Colorado Libraries.* Vol. 20 No. 3, Fall 1994, p. 28-29.

46) Crawford, Walt. "The card catalog and other digital controversies: what's obsolete and what's not in the age of information," *American Libraries.* Vol. 30, No. 1, 1999.1, p. 53-58.

47) Berry, John. "A 'world-class' library: LJ interviews SF city librarian Ken Dowlin," *Library Journal.* Vol. 121, No. 7, 1996.4, p. 32-34.

48) Matier, Phillip and Andrew Ross. "S.F. Library tossing thousands of books," *San Francisco Chronicle.* 1996.1.29.; Matier, Phillip and Andrew Ross. "S.F. Library agrees to quit tossing books," *San Francisco Chronicle.* 1996.1.30.

49) Minton, Torri. "Low-tech library users revolt," *The San Francisco Chronicle.* 1996.8.7.; Ybarra, Michael J. "Talk about throwing the book at the San Francisco Library," *Los Angeles Times.*

1996.9.3.

50) Minton, Torri. "Card catalog saved but S.F. Library not sure where to put it," *The San Francisco Chronicle.* 1996.9.5.

51) Baker, Nicholson. "The author vs. the library," The New Yorker. Vol. 72, No. 31, 1996.10.14, p. 50-62.

52) Baker, Nicholson. "Weeds: a talk at the library," *Reclaiming San Francisco: history, politics, culture.* James Brook et al., eds. San Francisco, City Lights Books, 1998, p. 35-50.; David Steinberg. "Panthers fight S.F. Library's 'hate crime'," *San Francisco Examiner.* 1996.11.9.

53) Kniffel, Leonard. "Criticism follows hoopla at New San Francisco Library," *American Libraries.* Vol. 27, No. 7, 1996.8, p. 12-13.

54) Curtius, Mary. "Across the nation, beloved institutions are trying to balance technology and tradition," *Los Angeles Times.* 1997.2.1.

55) Shapiro, Laura. "Libraries: a mall for the mind," *Newsweek.* Vol. 128, No. 17, 1996.10.21, p. 84-86.

56) Oder, Norman. "Despite New Yorker, mayor backs SFPL," *Library Journal.* Vol. 121, No. 19, 1996.11, p. 13.

57) Oder, Norman."'Discard' charges roil Dowlin's 21st-century library," *Library Journal.* Vol. 121, No. 13, 1996.8, p. 14-15.

58) Schuyler, Michael. "SFPL, viewed from the top left corner," *Computers in Libraries.* Vol. 17, No. 4, 1997.4, p. 32-34.

59) Berry Ⅲ, John N. "The lessons of SFPL," *Library Journal.* Vol. 121, No. 19, 1996.11, p. 6.

60) Harris, Michael H. and Stan A. Hannah. *Into the Future: the Foundations of Library and Information Services in the Post-Industrial Era.* Norwood, N.J., Ablex, 1993, 182p.

61) Lancaster, F.W.『紙からエレクトロニクスへ：図書館・本の行方』[*Libraries and Librarians in an Age of Electronics*] 田屋裕之訳、日外アソシエーツ、1987、256p.

62) Lancaster, F.W.「ペイパーレス社会の発展と図書館のかかわり」[*Implications for libraries*] 嶋田光代訳『現代の図書館』Vol. 21, No. 3, 1983.9, p. 173-176.

63) Birdsall, William F.『電子図書館の神話』[*The Myth of the Electronic Library*] 根本彰他訳、勁草書房、1996、254p.

64) "More barbs from author Baker," *Library Journal.* Vol. 121, No. 18, 1996.11, p. 11.

65) Cox, Richard J., Jane Greenberg and Cynthia Porter. "Access denied: the discarding of library history," *American Libraries.* Vol. 29, No. 4, 1998.4, p. 57-61.

66) 上田修一「ニコルソン・ベイカーの静かな図書館」『カレントアウェアネス』No. 267, 2001.11, p. 7-9.

67) Buckland, Michael K.「図書館目録の再定義:書誌と図書館レコードとの関係をとおして」[Bibliography, library records, and the redefinition of the library catalog] 堀川照代訳『書誌索引展望』Vol. 15, No. 2, 1991.5, p. 9-19. 引用は p. 15.

68) Cutter, Charles A. *Rules for a Dictionary Catalog 4th ed.* Washington, Government Printing Office, 1904, 173p.

69) Gregor, Dorothy & Carol Mandel. "Cataloging must change!," *Library Journal.* Vol. 116, No. 6, 1991.4, p. 42-47.

70) Kimbrough, Joseph. "Foreword," 前掲26)、p. xi-xiii.

71) Berman, Sanford. "The automated catalog and the demise of the cataloging mystique or, here comes the catalog the people always wanted . . . maybe," 前掲26)、p. 65-70.

72) Estabrook, Leigh. "The human dimension of the catalog: concepts and constraints in information seeking," *Library Resources & Technical Services.* Vol. 27, No. 1, 1983.1/3, p. 68-75.

73) Intner, Sheila S. "The re-professionalization of cataloging," *Technicalities.* Vol. 13, No. 5, 1993. 5, p. 6-8.
74) Thompson, James. "Ten ways to profit from a long engagement," *American Libraries.* Vol. 9, No. 9, 1978.10, p. 538-542.
75) Dusenbury, Carolyn. "Alas, poor card catalog," 前掲27)、p. 17-29.
76) Gouke, Mary Noel and Sue Peace. "Title searches in an online catalog and a card catalog: a comparative study of patron success in two libraries," *The Journal of Academic Librarianship.* Vol. 8, No. 3, 1982.7, p. 137-143.
77) 佐川祐子「公立図書館におけるOPACの導入：東京都杉並区立中央図書館の利用者記録の分析を通して」『現代の図書館』Vol. 28, No. 2, 1990.6, p. 66-75. 引用はp. 75.
78) 石倉賢一「カード目録からオンライン目録へ」『現代の図書館』Vol. 26, No. 3, 1988.9, p. 140-144. 引用はp. 143.